

## 生徒と教師から見た学ぶ意義とは

話題提供者 東京大学教育学部附属中等教育学校教諭 榎 府 暢 子

2001.12.1

中等教育学校の教諭をしております榎府と申します。私の方は、現場の立場からということで、生徒と教師から見た学びとはということについてお話したいと思えます。最初に、私としては、学力低下についてはかなり憂慮しております。教育改革については、今のままの教育ではたぶんいけないだろうという意味では、かなり賛成に近いのですが、この方法でいだろうかということになると、いくつか疑問があります。学力低下をどういう意味で憂慮しているかといいますと、今の子どもたちというのは、考えることをあまりしないような気がするのです。言われたことは一生懸命素直に取り組んでいくのですけれども、自分で考えることを面倒くさがるしてしまう、逃げてしまう、すぐ人に聞くという傾向があります。例えばいま私は家庭科の授業で、ショートパンツを作らせていますが、普通のパンツ系のものというのは右足と左足をそれぞれ筒型に縫ってからまんなかをつけるんです。そこで、「股下を縫いなさい」というと、「先生、ここが股下ですね」といって縫うんですが、できあがってよく見てみると、それがまるでスカートのように、右足と左足と股下を縫い合わせているんですね。だから、当然、本当は筒が2本できるはずなのに、いつのまにか一枚の布になってしまう。そこまできてやっと、「これは何か変なんですけど、どうしたんでしょう？」と聞いてくるんです。「人に聞かないでちょっと考えてご覧」というんですけれども。そういう意味で考えることをしていないというところに一番問題を感じております。一方、その裏側には、やはり生活力がないといいますか、あるものを買ってきて、もらったものをそのまま履いていけばいい、汚れたら洗濯に出せばいい、それがダメならクリーニング、破れちゃったら捨てればいいやという具合の生活があります。そういうものを直してみようとか、考えてみるという機会が全くない。こういう恵まれた社会のなかでは、なかなかハングリーにはなれない。ですから、総合的な学習が出てきたのは流れとして自然だと思えます。ただ、その総合学習に関しましては、そういう話が出たとたん、有名な本屋さんには、総合学習の本が積まれています。それから、いろいろと文部省からの資料等

もありますけれども、そこにある教員の裁量、現場に合わせた実践などの言葉と現実とのギャップ、そういうあいまいな言葉の裏と、それから、人や時間や予算というものが十分配分されていない状況、そういうなかで、どうやって今までのいわゆる基礎学力と呼ばれるものと、総合学習をリンクしていったらいいのだろうかということまで考えますと、単純に教育改革路線に賛成というふうには言えないような気がしています。

まず、生徒からの疑問ということの問題にしたいと思えます。何で勉強するの？藤澤先生のお話の方でかなり答えが出てしまったのですが、やはり学ぶ意義がないということです。とりあえずテストのため、受験のため、将来使わないのに。しかも、例えば受験をしていい大学に入る、ではそれで将来が保障されるのかというふうになると、特に最近の不況の様子などみてみますと、大学を出ても先が見えない、結局フリーターなのかな、やりたくもない、おもしろくもない、やらされているものをまだ続けるの？というような疑問があります。それに対しての教師の回答は、「自分のためなんだよ」につきます。私自身もやはり、今、難しい数学の数式は使わないとしても、その時に培った集中力であるとか、洞察力であるとか、計算、単純な計算力も含めてですけれども、それなりに役に立っていると思うのです。しかし、難しい問題、いま一つやりたくないようなものが並んでいるものを前にしたときの、生徒にとっては、満足できる回答にはなっていない気がします。

うちの学校の場合は、いわゆるエリートを作らない、普通の子どもの教育をするということで長年きております。また、もう一つの学力というのを唱えています。それを、具体的に偏差値でははかれない学力、または、後から効いてくる学力というような形で表現しています。附属のなかでは、そういうものを培うため、学年で取り組みをしております。また、友達同士グループで取り組む、それから、個人個人で研究するというような、自主学習の場をいろいろなパターンで設けてきました。例えば宿泊行事でも、単なる修学旅行ではなく、半年から一年かけての事前学習、そして、向こうにいったのテーマ

に沿った探求、調査、研究、インタビューといったもの、また最終的にはまとめるというようなことしてきました。また、テーマ別、課題別に生徒が興味のあるものに集まり、その少人数のなかで調査、研究の方向を知ったり、人とのふれあいをしたりしています。例えば私が担当したものであれば、昨年は保育園と老人ホームの訪問をやりました。子どもたちは保育園と老人ホーム、両方一緒に講座と聞きますと、保育園に行きたい、というふうにみんな言うんです。老人ホームって、暗くておじいさん、おばあさんがいるだけでしょという感じで。ですが、人数の関係で、両方に振り分けます。いろいろ話をして納得してもらい、それから、半年ないしは一年、週に1回ぐらいどちらかに通い続けるんですが、そういうなかで、毎回行くことによって、自分も何か役に立てる場面があるんだとか、こんなことで感謝をされた、それから、お年寄りには、また小さい子には、それぞれ違った時間の流れがあるんだ、そんなことを実際に体験してくれます。そして、ひょっとしたらこれから道で歩いているときに小さい子に会ったら、お年寄りに会ったら、ちょっと手をかしてあげられるかもしれないというような感想を書いてくれたりしています。そういうことで、偏差値でははかれない学力、例えば人と人とのつながりを考える力、それから、こういうときにはこうすべきだという適切な判断力、バランス感覚、また、物事を総合的に考える、そんな力が実は培われたのではないかと思います。また、あとから効いてくる学力については、うちの学校のなかにいるときには気がつかなかったけれども、例えば大学に入ってゼミをやったとき、それから同好会、サークル活動をする、そんなときにいつのまにか自分はその中心になって楽しんでそれをすることができているという卒業生の話などから察することがあります。いやいややらされるのではなくて、自分で課題を見つけて友達を誘って何かをすることができていた、それらが附属の実践のなかから、ひょっとしたらですが、偏差値とは別の道で考えられる、もう一つの学力として評価されるものではないかなと思います。

次に、基礎学力と総合的な学習についてですが、ここ数年の課題として、勉強しないことによる基礎学力の低下というのが、私たち教官会議の間でよく話題にされます。中学生、高校生ぐらいになってくれば、学校で習ったことをそのまま何もしないで頭のなかに入るといった人は少ないと思います。やはり何かしら習った単語であったら必ず復習して書いて覚えたりとか、数学も説明を聞いたあとで自分でちゃんと問題集を解いてみる、そういうことをしなければ身につかないはずであるのに、そう

いうことをしない。その結果、これは中等教育学校の最大の課題で、私たちも真剣に取り組まなければいけないと思っているのですが、いわゆる入学の時点から6年間の間に大きな学力の差ができてしまう。後期課程に入りますと、中等教育学校は1年生から6年生まで一貫ですので、3年から4年生まで高校受験なしにあがれます。しかし、あがった時点からは義務教育ではなくなりますので、進級規定というようなものが関わってきます。そうすると、その時点で突然、勉強してこなかったことが差し迫った問題になってきます。勉強しろと言われてもできない、もうやる気がない。勉強しないことによる学力の低下をくい止めるにはどうしたらいいか。これが問題です。やる気をなくした生徒に対しては、単なる今までの教授法で、教師の工夫だけでは不可能な部分があります。そうするとどうしたらいいか。本人を変えるしかないかなということ。本人を変えるにはどうしたらいいか、それが総合的な学習の学びになるのではないかなと思います。また、そこまでいかない生徒であっても、生活体験のなさというのはいかに深刻に感じられます。例えば授業の一例をあげますと、野菜を洗って、という、冬ですと何の疑問もなくお湯を出して、何でお湯で洗っちゃいけないの、とか、本校の生徒ではありませんが、ごはんを炊いたあと、お釜を洗いなさいといった炊飯器の本体に水をかけていたとか。今までだったら自然と話が通じているのが通じていない。ですから、そんなところから、実は説明をしていかなきゃいけなかったんだ、そうであれば、それはちょっと教科学習以前の問題ですから、自分たちで体験をしたり、総合的な学習のなかで入れていくべき要素になるかなと思います。また、生徒にとって、勉強は勉強のための勉強でしかない。本人のためになる、役に立つというのとはりあえずテストのため。数学のテストでいい点をとるには役に立つかもしれない、国語のテストでいい点をとるには役に立つかもしれない。でもそれが横に広がらない、そこで終わってしまっているんです。私は家庭科という教科なので、わりと物事を総合的に扱えます。今までのいくつかの教材のなかで、例えばアフタヌーンティーをやったんですが、たまたま英語の教科書でアフタヌーンティーという教材を扱っていたので、その部分をうまくちょっとコピーをして、せめて英語の授業中で習ったことなんだから、紅茶の入れ方ぐらいは英語で書いておこうと、英語で書いたんです。そしたら、何で家庭科の時間に英単語が出てくるの？というふうに生徒が文句を言いました。それから、栄養素を説明するのに、炭水化物の代謝であれば、 $C_6H_{12}O_6$ と簡単に化学式で書いて分解を説明すれ

ば、簡単に代謝の説明ができると思うのです。が、家庭科の時間に化学式はいらぬという意見が生徒からできました。せっかく学んだことをそこで終わらせてしまう、横につながるといふことを知らないし、横につながることによるおもしろさを生徒は知りません。

以上のことを考えてみる、つまり、学習方法を変えよう、生活体験という体験をさせよう、それから教科の枠を取り払おう、そういうことから考えますと、新指導要領にあります、自ら学ぶ力をつける総合的な学習というものは、うまく利用すればかなり効果的なものではないかと思ひます。ですから、基礎学力と総合的な学習、今、どちらをとるかというやうな形でかなり論争があるのですが、私たちの学校、また、私自身もそう思っているのですが、これは両方がリンクしていかなければ最終的にはうまくいかないと思ひます。新指導要領をやったら学力が下がるのではないかという懸念がありますが、それはただ単に楽しいなという体験をして終わらせるだけならばきっと子どもたちにとってもそれで終わってしまい、それ以上の発展はないと思ひます。ですが、ただ詰め込むだけの教育に今の子どもたちはたぶんついていくことができません。そうであれば、こういうことを教えたんだからこれをこちらで使おう、総合学習で体験したことがあるんだから、それを教科で活かそう、そのやうにお互いリンクができるやうな形でもっていけばうまくいくのではないかということ。今、本校では総合的な学習の時間数を増やして、いろいろとやっています。ただ、そういう形になってから2年目ですので、これから総括等を行っていきたいと思ひています。ただ、先ほど市川先生のほうからそういうことを評価するのは難しいとい

うやうなご指摘もありましたので、その辺のところは大学との連携等でよろしくご指導いただけたらと思ひます。

最後に、これからの子どもたちに必要なものということなのですが、やはり今までの偏差値では表せない力が必要なのだらうと思ひます。それが生きる力なのかもしれません。それとともに個性の尊重がいられていますが、個性とわがままは違ふと思ひます。権利を主張するだけではなく、権利を主張するなら義務を伴いなさい、そういう、きちんとした枠組みをある程度、親、それから学校、地域、そういうものが持った上で総合的な学習を三者が連携して行う、そういうなかで、さまざまなバランス感覚、そして基礎的な学力、何かを学ぼうとする意欲・態度が培われ、それらが子どもたちの力として必要となってくるのではないかと思ひます。これからの子どもたちというのはいはり、本当の意味の生きる力、それはもう今までのやうに狭い範囲ではなくて、世界に広がったところでの視点、それが国際理解という言葉や情報という言葉で新指導要領に入っていますけれども、そういうものを本当の広い意味で捉えられるやうな、そういう力が必要であるし、私たちが身につけさせたいと思ひます。そうなってくると、どこに問題が出てくるのでしょうか。学力論争のゆくえなど大きな問題にいく以前の問題として、教師の資質なども考えてしまいます。教師自身のトレーニング、生徒との対話なども含め、もう一度教育というものを見直す、そこらへんのところをしっかりとやっていく必要があるのではないかと思ひます。そういうなかでお互いに納得する、お互いの答えをさぐりながら学ぶ意義はこれだねというものが出ればよいと思ひます。以上です。